

涙 流

— 飯野十造の信仰と生活 —



宮崎博士（アジア救ライセンター所長）に、安倍川における昔のライ者の状況を語る。
（昭和四〇・六・二三） 安倍川鉄橋が見える



安倍川のライ者のクリスマス
エプロン姿とその隣りが飯野夫妻



ハワイモロカイ島のライ者を見舞う
（昭和28年12月）

刊 行 の 辞

飯野十造先生の伝記を刊行しようという声は、十造先生が昭和四十二年四月二十四日に亡くなられた後、一・二年で、信徒の中から強い声として起こって来たのであります。特に、現在静岡に居られない、昔の、先生から直接教を受けた信徒の中からその声が聞かれました。そして伝記刊行の気運は、昭和四十五年頃からはっきり具体化して来ました。

即ち、長男の但耶氏（静岡新聞社勤務）二男の保路牧師（静岡其枝キリスト教会牧師）の二人の、広範囲にわたったの資料の蒐集からはじまって、関係の諸官庁、諸団体との綿密な連絡や、遠方までの探訪、また、それ等諸団体からの親切な御助力や御協力によって、また、先生に対する信徒達の追慕の情やみ難いものがあったの結果、この度、飯野十造伝刊行にまで、ようやく漕ぎ着けた次第であります。むしろ、この度の出版が遅きに失する譏りをまぬがれませんが、伝記は、誰の場合でも同じように、特に十造先生の場合は、極めて多岐にわたった関

係上、先生が八十三才に御生涯を閉じられた日までを、只一回の伝記の刊行で済ますということとは不可能な事と言わねばなりません。然し、徒らにこれ以上日を延ばすことは意味のないことであり、諸方面からの御期待と御激励に対しても申訳なく思いますので、一応本書の欠点は、素直にみとめ、素人同志の能力の持ち寄りでしかないことを御賢察下さって、おゆるしを願います。

本書によって、私達刊行委員会がはじめから意図して居たことは、単に十造先生への個人感情的な追慕の情に動かされてのことではなく、この一書が、私達信徒の一人一人に呼びかけられる「力の書」であってほしいということにあります。この書を、上述のように「力の書」たらしめることが出来れば、十造伝刊行の事業は、とにもかくにもその意図は達せられたと言えると思います。

今後、続いて、第二回、第三回と回を重ねて改訂増補されて、広く、日本の、全世界のキリスト信者の愛の事業、神のみ業のあかしの大きな業の一足跡として読み取っていただけたら、

十造伝の刊行の目的は達せられる訳でありまして、心からそれを希求するものであります。

終りに、十造先生が生前からライフワークとして取り組まれた救癩活動の名著「愛は明け行く」の刊行当時から、深い御理解と御好意を賜りました三協印刷に心からなる感謝を捧げたいと思います。

昭和四十九年五月

静岡其枝キリスト教会
飯野十造伝刊行委員会委員長

鈴

木

誠

志

癩者の苦悩

私が家を出てから五日目でした。私の所持品が怪しいというので警察署に引かれまして、乞食のくせにこんな高価な品物を持っておる筈がない。盗んで来たのだらう、お前は盗人であるかも知れない。どこから盗んで来た、どここの生れた、さあ白状しろと、打つ蹴る、サーベルでこづき廻されました。その時舌をかんで死んでしまおうかと思つたが、それも出来ませんので、「癩病になつたので親に棄てられ、これは母親の心尽しです」と申しましたら、警官は「ああ癩病か、それじゃあ出て行け」と放り出されました、あまりいまいましくって涙も出ませんでした。

雨の降る日でした。宿場が見つかりませんので寺にとめて貰いましようと思つたら、丸々と肥つた僧侶が出てきて、「何んだお前さん達は天刑病じゃない

か、そこらにとまっては困るよ、あっちに行け、出て行け」と、病犬でも追うように追い払うのです。神社の境内にも参りましたが、神職が境内が汚がされるから、と、まるで汚物に唾するようにして追われました。犬に吠えられる、子供には石を投げつけられる、雨にはうたれる。或る寒い冬の夜、身を切られるような酷寒に堪えかねて神社の附近で焚火をして寒さを凌ごうとしたら、大勢の人がやってきて棍棒で追うやら石を投げつけるやら、水をかけるのです。中には巡查までまじって靴で蹴ったり、サーベルでたたいたりされました。

このように迫害され通して、人間らしい凡ての美しいものも、呪わしいものも、たたき出されてしまひまして、犬猫よりもひどいものになりました。腹は減る

目はかすむ、足は疲れて棒のように運べない、狐には穴があるし、空の鳥にも巢があるが、私達には、しかもこの病める五尺の体を横たえる所さえ与えられないのです。だから、疲ればそこが石の上であるうが、樹の下であるうが、宮であるうが、墓場であるうが、湿地であるうが、砂上であるうが、倒れた所が勝負で衛生も何にもあったものではありません。追われようが打たれようが、唾せられようが、木偶のぼうで無関性で「お有難う御ざんす」と、せりふってまったくあつどもなく流れ流れ、川に落ちた木の葉のようになつてしまいました。こうならなければ癩病乞食などできるものではありません。

だから、先生に近づかれるのが恐ろしかったのです。少しでも人間的な心が起つたりするなら、「この恨をほらさずば」と、怨恨の心、復讐の心に支配されて、人を殺したり、放火したり、どんなことをもなし兼ねないので。この仲間にもそんなことをした人もおるのです。

「ああ悩める病かな、この死の癩病者よ」です。

それは外部的の交渉問題ですが、癩病者それ自身の問題となりますと、それがあまりにも惨酷なのですよ。この病人は、視覚も、聴覚も、嗅覚も、味覚も、触覚も次々に五官の作用が破壊されてゆくのです。それはそれは可哀相です。それに従って内部の疾患もまた之にともなつてやってくるのです。

第一、この病気は目をやられるのですよ、耳もやられ、鼻も腐れ落ち、咽喉には血筋ができて窒息するので切開手術を施してカニールを入れて呼吸しているのです、これは実に哀れです、みじめです。遂に胃もやられ、肺は冒され、全身これ傷だらけ繃帯だらけになつて入院もできずに乞食小屋で死んで犬猫のように葬られて行くのです。

癩病は病氣の問題のようで、それで懊惱寂莫苦悶、それこそ到底筆や舌をもって表現できるものではありません。

おまけに旧思想では遺伝だ、血統だ、天刑だ、業病

だと親戚縁者までも同類者として排せきされ、新しい学説では伝染病の名をつけられて恐怖され、あまつさえ親兄弟、親戚、朋友、知己にまで厭われ、嫌われ、侮られ、嘲けられ、憎まれ、敵視されるのです。何という悲痛極まる重刑でしょう。

先生、御願いですから、癩病だけは人の世から撲滅する運動を強硬に進めてください。

と、私にしがみついて泣きたてた。

私は、骨の髄の髓まで癩病を厭う心をきざみつけられ、癩病根絶の焰が炎々と燃え上るとともに癩者に対する愛情も燃やされて、

「それはひどい、可哀相だ。無智なものならいざ知らず、教育もあり財産もある親までが棄てるなんて、人間の愛情などお互に利害の均衡の保たれているだけだとは呆れたことだ。予言者イザヤが「なんじら鼻よりの息のいでいりする人に倚ることをやめよ、斯るものは何ぞかぞうるに足らん」といった。キリストの弟子

達さえ癩病人がキリストによって癒されることを求めて来た時は追い払おうとしたのだ。当時の慈善家も、宗教家も、学者等も、癩病人の風上さえ歩くことをも許さなかった。ただキリストだけが「我が心なり、潔くなれ」と手をのべてお癒しになったのだ。

「凡て疲れたるもの、重荷を負えるものは我れに來れ、我なんじらを息ません」と、病人、罪人をお招きになつたのはキリストだけです。聖書の詩篇の記者は「父母我を棄てるともエホバ(神)我を迎え給はん」と叫んでいる。聖パウロは「噫われ困苦人なる哉、この死の体より我を救わん者は誰ぞや、これわれらの主イエス、キリストなるが故に神に感謝す」と証言しています。失望しなざるな、自暴自棄しなざるな、主キリストは信ずる者をお救い下さいますよ」

「……………」

彼女は泣いている。神はその独子を賜ふほどに世の人を愛し給う。

はなちりうせては たきぎにうられ

いえまづしければ　ひとにすてらる

たれをかたのみて　なににかたよらん

ただ神のむすぶ　あいのともあり

(讚五五八)

「お嬢さん、人は人ですよ、癲病人を救おうとする人さえひどい目に会わされますよ、私などまるで癲病人の如く取扱われます。助けに行つた相手方からさえ乞食の如くされたり物をたたきつけられたり、殺すなどとおどかされたりしますよ。」

そればかりではありません。癲病院の役人からも、癲病人を可愛がり過ぎる、余計なおせっかいが過ぎるといつて私を葬つてしまえと癲病者の名で検事局にまで公訴されて家宅搜索されたりして家族のものを悲しませたこともあります」

或る日のこと、子供がまだ中学生の頃、家に泣いて帰ってきた、どうしたのとたずねると、学校で先生が生徒の前で、

「飯野、お前のおやじは癲病を可愛いがつて騒ぎ廻

るが、父の兄弟に癲病でもあるのか、といわれましたが、お父さんの兄弟にあるのですか、……。」と泣く。

「あるよ!!」

「ほんとですか?」

「ほんとだよ、少なくとも、三、四万人はあるよ。」

ローチャー博士の推定によると日本には十万あるとのことだ。日本人は兄弟姉妹だ、同胞だからお父さんの兄弟なのだ、それだから騒ぐのだ、明日学校に行つて先生に、おやじの兄弟に十万人もあるそうです、と、同時に先生の兄弟にも十万人あるのだということを知つてくださいといいなさい。」

と答えると、子供は涙を拭き、泣くのをやめて、

「お父様わかりました。」と、確信をもって答えた。

それから癲病者が来ると、

「お父さん、兄弟がきましたよ。」

と呼んで救済に喜んで協力してくれた。子供らは皆自動車運転して村々の病者を拾い廻り、救助して病院に送り入れた。

教育家までがたわいもないことをいって子供まで泣かしたものである。

神がなく、宗教もなく、救いもない人の声に耳を貸しては、愛の道は歩けません。

折角手折ってきて床の間にさして愛で讃めても、花

ささやかな告別式

「只今」

「お帰り」

薔薇の垣、藤棚、葡萄棚のある、清楚な教会堂、家族一同飛出して迎える。

「安倍川の姉さんが、天国へ往ったよ。」

「あら、あの姉さんが。」

皆な、びっくりしてひざまずく、肅然!!

「可哀相に………」皆父にすがりつく。

「さあ、姉さんの告別式をしてあげましょう。」

が散れば捨てるのです。家が貧しくなれば人に棄てられるのです。けれど、そこに神のむすぶ愛の友があるのです。了解出来ましたか………?」

(八六一—九二頁転載)

祭壇に遺骨は安置され、教会の庭の花で飾られ供物が献げられ、讚美歌は歌われる。

風吹きすさみ 雨ふりて

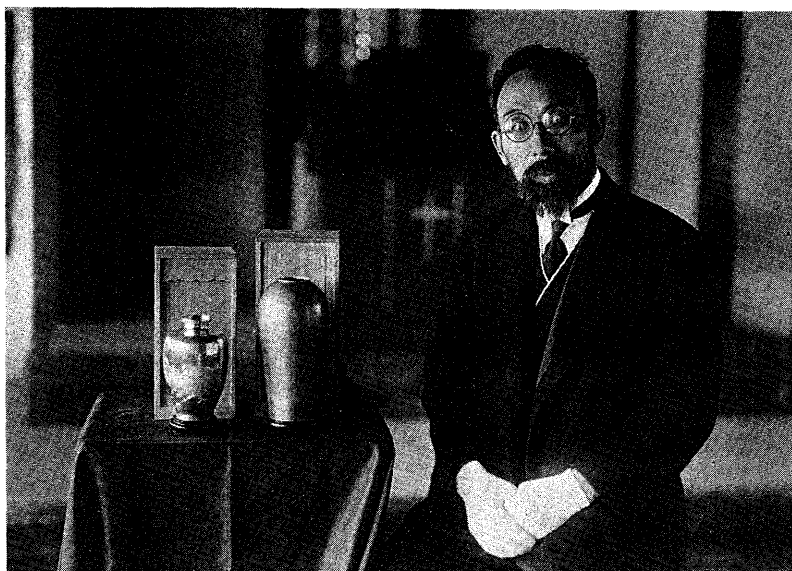
なやみしげく さちはうすき

はかなき夢の 世のなかに

われはかくて いつまですまん

親子はハンカチーフで両眼をおさえてすすり泣きしている。

「……………」



救ライ活動で表彰
記念品の花瓶



(↑左) 貞明皇太后より御下賜
(昭和8年6月10日)

(↑右) 安達謙蔵内務大臣より
(昭和6年4月29日)

勲四等瑞宝章を受けて
(昭和40年4月29日)

ラジオ人生読本

伝道と救癩 飯野十造

皆様、おはようございます。私は、もう八十歳になる伝道と救癩に捧げ尽してきた牧師の飯野十造であります。

私の念願は戦争のない、一人のところを得ざる者のない、皆で生活を喜び、生きることを楽しめる平和な世界の建設であります。

人は誰れびとも、自由と豊かさで繁栄と、限りなき命を求めています。然るに、パンを求めて石が与えられ、人も国も求めるものが与えられないで、実に悲惨な生活へと追い込まれております。

私が救癩に献身したのは、ある日曜の晩のことです。「神は愛なり」との題のもとに、ヨハネ伝三章十

六節「神はそのひとり子を賜ったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためであります」この聖句はキリスト教のすべてのすべてでございます。神は愛であります。ひとり子を賜ったほどに愛される。人種の差別はない。誰れでもである。しかも滅ぶべき罪人を愛して、救って、永遠の生命をこれに与えて、天国に連れて下さる。そのため、キリストは十字架につけられ給うた。天下により頼みて救われる名は、このほか与えられなかった。これは、すばらしい恵みである。

使徒パウロは「われは福音を恥としない」それはユダヤ人をはじめ、ギリシヤ人にも信ずるものに救いを

えさす神の力である。(ロマ書一章十六節)

キリストは死せる我等を復活させた。癩病の人のことを思って癒された。十字架の盗人を許して、天国に同伴せられた。「さあ、救われ、癒されたいお方は、恵みの座に進み出て、悔い改めて、救われなさい」と招きましたら、多くの人が進み出、喜んで家に帰りました。然るに、会堂のすみに、一人の青年がいた。彼に「集会は終わりました。帰ってください。また次の日曜においで下さい」と告げました。ところが、彼は「先生、神は愛です。それは本当ですか。それならば私を今晩泊めて下さいませんか」と言われた。私は二階に案内して、茶をすすめ、床をとり、「さあ、どうぞ」とすすめると、「先生、私と今晩いっしょに寝てくれませんか」と彼は叫んだ。

「はいはい、よしよし」と言うて。すると彼は、両手を私の前にさしだした。

「私は癩病です。私は一高の生徒です。癩が発生するや、親兄弟から忌み嫌われ、家のために、どこかに

行って死んでくれと追い出されたのです。もう誰も、親切に言葉をかけてくれるものはありません。死ぬには死なれず、生きることも出来ません」と泣き伏しました。

さあ、私は驚きました。いっしょに寝てやる勇氣も愛もない。さりとて、牧師だから、嘘は言えない。ここで私は隣室に逃れて、神さまの前にひれ伏して、「神さま、私に彼と同衾する愛を与えて下さい。どうか、彼を失望させないようにして下さい」頭を垂れて、膝に首を押し込めて祈りました。

自分は説教家だ。口の宗教だ。偽善者だ。心から私は悔い改めた。幸いに、愛は与えられた。彼の青年の前に出て謝罪して

「さあ、休みましょう」

と、言いますと

「先生、ありがとう。失礼しました。私は神を見ました。暖かい言葉をいただきました。これで十分です。死んでゆけます」

と、走り出した。追いかけたけれども、もうだめでした。私は、その夜は眠れなかった。一晩中、輾転反側した。

三日の後、鎌倉の警察から通知があった。恐る恐る参りましたらば、「お前の身内かなにか、海岸で死んでいる。引き取れ」とのことであった。かわいそうに彼は、海岸の松の枝に首を括って死んでいた。前途洋々たる青年が自殺した。そして、無縁者の一人として葬られた。私はたまらなくなつた。

そして、彼を救わなければならぬという愛が燃えた。義憤さえも覚えた。この時、私の心のうちは救癩の心にとらわれてしまった。

この頃、日本人には癩が十万あると、ロジャー博士は発表した。

自動車を求め、愛の家を設立し、町々村々を走りまわり、ついに乞食も家庭内の癩もその哀れな姿を見ることができなくなりました。

全国の癩病院に福音を伝えて歩きました。桜を植え

たり、家を建ててあげたり、金品を贈ったり、戦争までお茶を飲ませたり、ついに足を欧米まで進めました。一人の田舎牧師が、静岡でも、あの多くの癩者の姿が見えなくなつた。このことが、うれしいことでした。その報いは、ひどい目にありました。殺されそうになつた時もございます。ついに脳溢血で倒れ、中風になり、ほとんど、私がこんどは癩者と同じみじめな姿になりました。

けれども、そのつど、そのつど、助けが与えられた。私はすぐ、伝道と救癩にインドまでも足を進めなければならぬ。

アジア救癩協会は創立された。元インド大使那須氏が理事長として、宮崎博士はその責任を負って、インドに渡り、ネール首相が土地を提供して病院は建てられた。

つれづれの友となりても慰めよ
ゆくことかたき我にかわりて

私は詠う

賤が身は ゆくことかたきわれにかわりて の

御歌うたいつづけん 死にいたるまで

神の恩寵を感謝します。ありがとうございました。



私は静岡旧メソジスト教会の伝道者として赴任したのは大正五年の春でした。

早朝、静岡全市を一望に収められる浅間神社のある賤機山上に登って、その昔、徳川のキリシタンを迫害し、罪なき声を、戦慄目を覆うばかりの残酷な、殺戮を極めた時代を追想して熱涙滂沱たることを禁じ得ませんでした。

私は跪いて、「神様、どうか彼等の罪を許して下さい。此の町を祝福して救いたまえ。私を用いて、あなたの栄光を顕現せしめたまえ。私は今、新に身も魂も、家庭も、此の町の為に捧げます。そして死に至るまで衷心に働かしめ給え。アーメン」と祈りました。

正月元日、浅間神社の鳥居のほとり、神社仏閣の緑

日などに、癩病乞食の多いのに驚きました。巡査には追われ、人々にはきられ、実に哀れな姿を見ました。彼等は安倍川の下流の松並木、堤防の間に乞食して露命をつないでおりましたので御座います。その数は数十名を数えたこともあります。

大正の終り頃でした。彼等は自暴自棄して、あさましい犯罪を敢てしておりました。危険千万であります。ある患者は敵討をするのだと言って、毎日「此の町を癩病の町にする」と言って、癩菌を入口に塗って歩いたと言う患者もありました。実に危険千万であります。

公衆衛生もテールブルの衛生であってはならない。

神様は私に「彼等を救って此の町を浄化せよ」と命じ給うた。

その頃、私の生涯に一転期が臨んでいた。それは宗派の弊害、牧師の任免、進退、社会教育事業、その他が外国依存であってはならない。もう日本は外国の為に救いの手をのばさねばならない時なのである。然ら

ざれば外国とに、もしもの事があつた時には、苦い盃を飲まされなければならない。それはあの戦争で皆経験させられた。人間の交りの出来ないような事でははならないことを、私は一生を決した。さあ、これは大麥だ、家族の理解と協力を求めなければならぬ。そこで家族に相談して、ママは「癩病の乞食を救う為に、自ら乞食になる」と申しました。皆賛成してくれて有難かつた。

大正十一年、事業を停止して宗派を去り、独立、自給伝道生活に踏み切つて、親子七人、助けねばならぬ犯罪者数名の大家族である。然り、墓を買い、本籍を移して、錨を下して仕事に取り掛つた。

人は「飯野は飢え死ぬであろう」と言つた。私は、凡てを神に任せて、此の救護運動に自動車で飛び廻つた。その救いの手は、腕に、口に、手足に、全国癩病院に及び、桜を植えたり家を建てたり、金品を送つたり、人物を送つたりした。子供も、恥ずかしめられながらも忍耐して癩者を運んでくれた。夜中に警察から

送られる患者が来る。夜中に起きて食事を作って此れに与える。愛の家を建てて、救癩は本腰になつた。妻は夫を捨てに来る、親は子を捨てに来る、それを嫌な顔一つせず、よく家族は世話をしてくれた。理解は実には有難いものである。

一人も苦勞にせず、肺病にも癩病にもせず、皆教育して奉仕者にしてくれたのは、家族の理解ある功績である。長男、次男は大学を卒業すると戦争に駆り立てられて帰らず、三男は癩の医者になると言つて東大に学んだ。四男は科学者になつて日本を救うのだと勉強していたが、二人とも爆弾で殺された。私の村作りも理想も目茶苦茶にされてしまった。戦争は金輪際すべきものではない。核兵器など、各国が文句無しに海の深みに投げ込むべきである。

家内は、鮮血の流れる愛児二人の死体を抱いて三日間寝んでいた。見舞人が来て「先生でも此んなひどい目に逢うのですか？ 神の愛が疑われます」と言う。家内は答えて、「神が与え、神が取り給う。神は誉む

べきかな」此れで人並みになりました。と、愚痴一つ言わなかった。

私が世界平和の為に、復員船の為に、世界癩者慰問の為、世界の旅の出来たのも、神と皆様のお蔭でありますとともに、家族の理解があったからであります。二人の娘もどこにも行かず、よく我々を助け、慰め、喜ばしてくれたお蔭であります。理解こそ万事完成の生命であります。

主は「汝等互に相愛せよ」と言われた。



協力は愛で御座います。生み出す生命であります。力であります。慰めであります。励しであります。喜びであります。協力なくしては何事も出来ません。全知全能な神様でさえ、キリストの協力無くしては救いの大業は出来なかつたであります。

自然界は万物の協力によって形成され、生き、生かされております。私は、よき協力者の与えられたこと

を先ず感謝せねばなりません。私ほど人に愛された者は無かるうと思います。私の伝道、そして難しい救癩事業が、五十五年間も継続されて来た。最も至難とされた癩病人が救われ、その哀れなる姿が見えなくなりました。

汽車を買切にして癩者を病院に運ばんとしたが、汽車の用意は出来ましたけれども、旅費が無くて困っておった事もあります。祈っておりますと、幸いにつきもその都度、神様は私を恥づかしめてくれませんでした。いつも助けてくれたのみならず、多くの篤信の善良なる青年男女をもお与え下さいまして、その数は実に枚挙に暇ない程であります。その中の二、三を申し上げますならば、広畑隣助君は、興津農事試験場の研究生でありました。私は聖書研究をそこでいたしました。その時に見出したのが彼でした。

彼は、まれに見る敬虔な篤信家でありました。彼は教会の仕事をよく助けてくれました。安倍川の癩者に食事を運んだり、寒い冬の日布団を運んだり、病者

のために愛の労を取ってくれました。実に有難いことでした。遂に病者の枕辺を花で飾ると言つて、東京の全生園に献身しました。

彼の園芸の才能を働かして病院を花で飾り、色々な組合を組織したり、牛豚を飼つたりして患者を喜ばせ、夜は、病者に星について語り教え、彼等の心を星に繋ぎ、昼は土に親しませて詩情を養い、造園造り、人造りに院長に協力しました。彼は、精根を傾け尽してこの素晴らしい仕事を完成した。彼は、人の忌み嫌う彼等と共に生活もいたしました。実に素晴らしい人でした。私は彼によってどんなに慰められたか知れない。

又、安倍川の癩者を長島愛生園に送るとき、臨月の女性がおりました。静岡市に助産婦を求めたけれども誰も行ってくれません。東京に行つて探したら、藤田さとゑさんが引受けてくれました。長島愛生園に無事に入院させることが出来、直ぐ女子が安産し「愛子」と名を付けた。藤田さとゑさんは、癩者の実情をみて遂に一生を捧げ、長島の保育所には無くてならぬ人物に

なりました。戦争中も光田院長を援けて素晴らしい奉仕をして、彼女は天国に帰られた。さとゑさんは、実に最上最善の奉仕をしてくれた。天国にありて、神より報いられ、誉められ、喜ばれておるでありましょう。

さらに貞明皇后様の事であります。

昭和五年頃の事であつたと思います。癩者を私にお世話させて下さいと、宮内省に申しあられたとの事、けれども研究の結果、宮内省はお許しになりませんでした。そこで陛下は、長年貯蓄されたお金を癩者及び癩奉仕者に御下賜なさいました。

昭和七年の宮中御歌会に「癩者を慰めて」と言う御題を出されて、その時、陛下は

つれづれの友となりても慰さめよ

行く事難き 我れにかわりて

と詠われた。

これは癩者を喜ばせた。奉仕者をして感奮狂喜せしめた。癩運動に愛の燈火を点された。

内務省では癩予防協会を設立された。今月の二十五

日は貞明皇后様の誕生日であります。この日を「救癲の日」といたしまして、救癲運動が全国に活発に行われます。

私が昭和二十一年七月、お許しを得て皇太后様の慰安会を沼津の御用邸で開いた時、陛下は「インドには癲者が沢山ある。日本人の救いの手が延べられることが望ましい」とのお言葉であった。

私は驚いた。実に目を真赤にして語られた。私は、私に対するそれが遺言となった様な気がします。

陛下は逝かれた。私はそれを語った。それが実現を祈った。

幸いに聞かれて、那須さんが理事長になって、アジア救癲協会が設立された。インドに癲病院が建てられインド救癲に力を尽すことになりました。これで日本人は、始めて人間の仲間入りが出来たのだと私は思います。今まで、外国の救いのためには手は出さなかつた。実に愛の協力は、国際親善の握手をさせる。かくして世界平和がもたらされるのでありましょう。

私が今日あるのは、これらの協力者が多く与えられたこととございます。しかし、家族の理解と協力がなかったなら、これも及ばなかつたでありましょう。

私の戴いた恩賜の御衣も、藍綬褒賞も、大臣や知事・市長から戴いた記念品も、みんな協力者の胸を飾るべきものであると思います。

(NHK 人生読本放送)

一九六三年六月十七、十八、十九日)

書名「涙流」のいわれ

「イエス涙を流し給う」

(ヨハネ福音書第一章三五節)

聖書の中に、弟ラザロの死を悲しんでいた姉マリヤが、神の子イエスの力を信じて「主よ、もしあなたがここにいて下さったなら、わたしの兄弟は死ななかつたでしょう」と、イエスに訴えた。

イエスは、マリヤの信仰と兄弟愛に「激しく感動」して「涙を流された」と云うお話があります。

十造先生は、信仰と愛の実践者としてイエスにあやかろうと、自から号を「涙流」とつけられました。

先生が好んで用いられたこの雅号を書名と致しました。

涙流 飯野十造の信仰と生活

一九七四年一〇月二五日印刷
一九七四年一月三日発行

編者

静岡其枝基督教会
飯野十造伝行委員会

発行所

静岡其枝基督教会

420 静岡市賚谷一丁目二七九番地

電話(〇五四二)四三二四一

静岡市小黒一丁目九番一号

印刷所

三協印刷株式会社
電話(〇五四二)六六一七一